

# 石狩川と古地図

明治以降、測量技術や作図法が発達し、今日では非常に精度の高い地図が作られています。しかし、明治以前にはこうした近代的な地図は作られず、多くは乏しい情報をもとに、絵画的手法を用いて描かれていました。こうした地図を絵図または古地図といいます。古地図は今日の地図からすれば稚拙です。しかし、それ故に当時の人々の地理感がそこに垣間見えます。

江戸時代末期に松浦武四郎が実地調査をもとに、極めて詳細な「東西蝦夷山川地理取調図」（安政6年〈1859〉刊）を描き、それが明治以降の北海道開発の手引きとなつたことは周知の事実です。しかしながら、松浦より50年も前の江戸中期に、今日の北海道図に引けをとらない北海道の形をもち、石狩川を初めてする内陸河川の詳細な流路や地名を載せた地図が作られていました。またそればかりでなく、その当時、そうした地図をもとに石狩川流域を中心とした蝦夷地開発策も幕府に提起されています。ここでは北海道の古地図をいくつか取り上げ、

和人がいかにして石狩川の認識を深めたかという観点でそれを検討し、江戸中期にこうした状況が出現する経過を探つてみます。

現在の石狩川は、本道中央にある石狩山地の主峰石狩岳に源を発し、忠別川、雨竜川、空知川、千歳川、豊平川などの諸支流を集めて日本海に注いでいます。しかし、今日の研究によれば、大昔、石狩川は江別市辺りで南に流れを変え、石狩低地帯を通り、苦小牧市付近で太平洋に注いでいました。それが、約3万年前の支笏火山の噴火による堆積物



「正保国絵図」(正保元年、『日本古地図大成』より)

で、千歳市付近に、現在の石狩川流域と湧払川流域を隔てる分水界ができ、その結果、この古石狩川は塞止められ、やがて日本海に注ぐようになりました。しかし現在目にすることができる古地図の中に太平洋に注ぐ古石狩川を描いたものはなく、現存する古地図は約3万年前より後の認識に基づいて日本海に注いでいます。しかし、今日の研究によれば、大昔、石狩川は江別市辺りで南に流れを変え、石狩低地帯を通り、苦小牧市付近で太平洋に注いでいました。それが、約3万年前の支笏火山の噴火による堆積物

古地図を見て気づくのは、天明年間（1781～89）以降になつてようやく、石狩川が実像により近い形で描かれるようになるとということです。北海道は中世以来、日本と国境は接するものの、異民族が住む「異域」とされてきました。江戸時代になつて、幕府からアイヌとの独占的交易権を与えられ、「異域」との窓口としての役割を担つた松前藩は、北海道を和人が住む道南の松前地（和人地）と、アイヌの住む蝦夷地に分け、和人が勝手に蝦夷地に入ることを取り締り、そこに定住することも禁じました。その結果、和人が蝦夷地に出入りする機会は年数回、そこに設定された商場（アイヌとの交易地）で交易する時以外ほとんどありませんでした。そのため、蝦夷地にあつた石狩川はその河口に早

## ●全流域 ●開拓草創期

くから商場があつたものの、しばらくの間その十分な情報が和人の間に伝えられることはなかつたのです。

作成年代の分かるもので、石狩川を描いた最も古い地図は、正保元年（1644）に幕府の命によつて松前藩が作成した正保国絵図です。第7代藩主邦広の子、松前広長が著した『松前志』には、この図ができるまで松前藩には蝦夷地の地図らしきものはなかつたと記されています。幕府は全国統治の証として、慶長、正保、元禄、天保の4度、全国の大名に古代以来の「国」を単位とした国絵図の調製を命じ、松前藩は正保年間に初めてこれを作成しました。この図は、現在の北海道図とは比較にならないほど稚拙なものですが、海上からの調査とはいえ、藩の実地調査に基づいていたため、しばらくの間権威をもち、元禄13年（1700）の元禄国絵図もこの図を改訂して作られました。



元禄13年松前藩作製図 天明元年  
（『松前志』）北海道大学附属図書館蔵

出入りする人々の間に、石狩川水系では本流より千歳川と思われる支流の方が、日本海岸と太平洋岸を結ぶ交通路としてよく知られていました。前述のように、約3万年前の噴火でできた分水界で古石狩川は塞止められましたが、この分水界は人々が越えるのは容易で、和人が入る以前から人々は、千歳川と湧払川の水運を利用して古石狩川が流れているように往来できました。古地図の中には、石狩と苦小牧付近を結ぶ水路によつて北海道を南北に分断して描くものがありますが、これはこうした状況を誇張して表現したものでしょう。

「蝦夷興地全図」 天明6年頃  
(市立函館図書館蔵)

石狩川は北海道の中央に源を発し西にゆつたりと流れ、本海に注いでいて、大河石狩川そのものです。

引かれています。この朱線は松前地の海岸線にもあり、交通の要路を示すものと考えられます。これらの描写から、当時、蝦夷地に出入りする人々の間に、石狩川水系では本流より千歳川と思われる支流の方が、日本海岸と太平洋岸を結ぶ交通路としてよく知られていました。前述のように、約3万年前の噴火でできた分水界で古石狩川は塞止められましたが、この分水界は人々が越えるのは容易で、和人が入る以前から人々は、千歳川と湧払川の水運を利用して古石狩川が流れているように往来できました。古地図の中には、石狩と苦小牧付近を結ぶ水路によつて北海道を南北に分断して描くものがありますが、これはこうした状況を誇張して表現したものでしょう。

このように、石狩川本流より支流の千歳川を強調するような描写は元禄国絵図にも見られ、天明5年（1785）に林子平が、当時民間で知り得る情報をもとに描いたとされる「蝦夷国全図」にもそれが踏襲されています。しかし、元禄国絵図には初めて石狩川流域の地名が記され、「蝦夷国全図」には石狩川の水源として「ユウベツ山」が描かれています。これは、石狩川の情報が和人の間に蓄積されたことを物語ります。

こうして、石狩川が千歳川とは比較にならない大河であることが地図に描かれるようになります。それが「蝦夷興地全図」です。この図は、老中田沼意次が、天明5、6年（1785、6）に実施した幕府による初めての蝦夷地調査の成果でした。

# 石狩川河口の歴史

（）石狩の町で、北海道の母なる石狩川は始まります。終わり、サケの故郷石狩川は始まります。蝦夷地産物の首座を占めた石狩鮭と、石狩川水運の推移は此の町の盛衰に通じ、石狩川の歴史にも連なるのです。

河口は古くから港に利用されました。その交易は松前を始め奥羽・北陸・大坂・水戸・江戸に及び、イシカリの賑わいは西蝦夷地第一の繁榮と唱され、名産石狩鮭の名と共に全国に知られたのです。

明治以前の河口の状況については、さまざまな文献に記されています。

『津軽一流志』寛文10年（1670）の牧只衛門聞取書には、「石狩川浜口広さ二百

間程、同深さ七尋程、川奥え入候ては十三尋の所も御座候。常に水うつまき候て、流候様には見不申由」。『津軽紀聞』宝暦8年頃（1758頃）には、「石狩、大川有、千石積の舟何十艘通路（略）川にある鮭多く石狩魚として日本に渡る」とあります。

また、4回ほどこの石狩の地を訪れている

●石狩市●開拓草創期  
松浦武四郎は、「此處にイシカリ川と申す大



ワッソンのイシカリ図

を仰ぐべし」幕府石狩詰調役荒井金助 安政6年（1859）。

明治2年、蝦夷地を改め北海道と称され、積極的な開拓が始まると、石狩は首都札幌の建設や、石狩川流域の開発の拠点として大きな役割を期待されます。が、その主役は石狩川の水運でした。石狩川は交通の大動脈であり、当時のハイウェイでした。

開拓使札幌本府建設の物資は、石狩川の伏古川へ大友堀を利用して搬送され、明治3年には東久世長官が石狩を巡視しました。明治4年にエ・ワルフヒールドが船で石狩川を調査して、「川巾半英里」と報告し、5年にケプロンに報文を提出します。それを受け、開拓使は帆船・汽船を購入して石狩川の運送に充てました。

そして同年9月、開拓使測量長ジエームス・ワッソン、同測量補助モルレー・ディ大尉によつて石狩川下流部の測量が実施され、この測量によつて翌8年に開拓使地理課は「北海道石狩川圖」を作成します。開拓使は小樽（石狩）篠路間の汽船航路を開始し、水運の便を強めたのでした。

近藤重藏 文化4年（1807）。「札幌に府を置きなば石狩は不にして大坂の繁昌を得べく……」松浦武四郎 安政5年。「石狩の地他日必ず一都府となり、天皇の臨幸

## 和田郁次郎と輪厚川

北広島市を流れる志文別川、裏の沢川、輪厚川、音江別川の4本の川は、およそ平行して流れ、本流の千歳川からほぼ直角に分かれています。古代アイヌの人たちは、この川の状態を人体の肋骨（ろこう）（ウツ）に見立てました。また『松浦武四郎地図』では、ウツツとなっています。ここからウツ→ワツチ→ワツツ→ワツと、転訛（さんか）していくと考えられます。

この輪厚川流域に明治17年5月、最初に

移住してきたのが和田郁次郎と18戸の人々でした。続いて8月に2回目の移住7戸が加わり、合わせて25戸になりました。最近の研究で、道立文書館の古文書の中から正確な資料が見つかり、多少の推理を加えて移住者の名前が判明しています。

「移住者を乗せた船は3月に宇品を出航した。船の中では移住者たちは毎日歌つたり踊つたりして楽しかった。船の弁当は重箱詰めで毎日鮭のおかずで臭くて食べられなかつた。船は小樽に着きそこから錢函まで汽車に乗り、その後は札幌まで歩いた。豊平の旅籠屋（ごや）で2日泊まつた。荷物を背負つたり担い

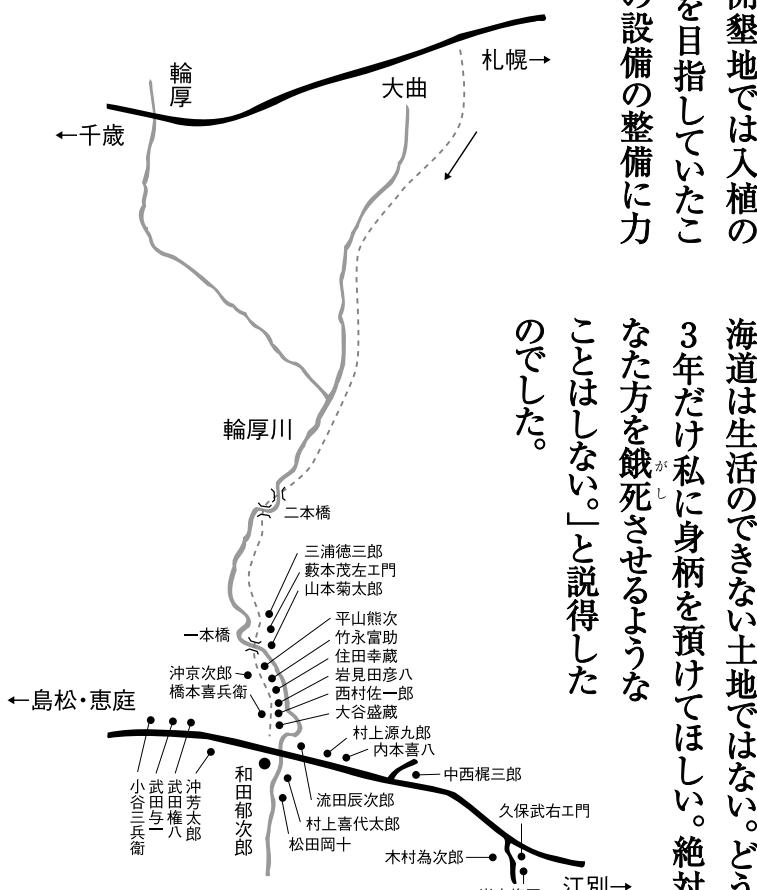
だりして運んだ。大曲から入つて中の沢に至る途中に板小屋があり、そこで休み弁当を食べた。広島開墾地に着いたのは5月23日だった。輪厚川沿いに建つていた板小屋は極（きさく）貧（ひん）きと草葺（くさなみ）きがあった。土間に草を敷き並べその上に筵（むしろ）を敷いて寝床（ねゆか）にした。醤油樽（さけづら）を真ん中から切り、一つは足を洗い、一つは顔を洗うのに使つた。移住者が最初に入つた小屋を和田小屋（わだのや）と呼んでいた。窓はなく入口には筵を吊してあつた。」

注目されるのは、広島開墾地では入植の

当初から水田による稻作を目指していたことです。まず用排水路等の設備の整備に力を注いでいます。北海道では

は稻作は危険な作物と見られていました。小屋掛、種子の買入、道路を建設し、水門を作り、用水路を開きました。郁次郎たちが

切り開いた大曲と開墾地間の道は、広島町役場と大曲を結ぶ現在の道道大曲栗山線の最初の姿です



明治17年当時の移住者住居略図

し、水門は現在の大正橋の上流側とあゆみ橋の上流側に築いたもので、その用水路とともに、昭和60年頃まで利用されていました。

着々と開墾に励む移住者たちを待っていたのは北海道史上空前の大冷害でした。移民の到着が遅れ、植え付けも遅かつた稻作が収穫（しうう）皆無（かいむ）となつたのも無理のないことでした。不作になつた移民たちの間に混亂や動搖（じどうよう）が広がりました。この時、郁次郎は静かに「今年は凶作（きゆうさく）で困難なことになつたが、決して北海道は生活のできない土地ではない。どうか3年だけ私に身柄（みのなま）を預けてほしい。絶対あなた方を餓死（がし）させるようなことはしない」と説得（せつとく）しました。

# 千歳川会所

むかし北海道の物資の輸送は幕府の統制下にある廻船によつて行わされていました。場所とも呼ばれる商い場は胆振・日高の各地にありました。場所は各河川に遡上するサケ等と、この頃の蝦夷では生産されない生活物資や食糧と取引するためでした。しかし沙流・アツベツ・モンベツ・浦河・様似などほとんどの場所は資源が不足していました。

勇払付近の蝦夷人（アイヌの人々）の男は春のうちは椎茸を採るくらいしか仕事がなく、女も作物を少々作っていた程度で天産には恵まれていませんでした。幕領になつてからは春夏は海での漁も試みるようになりますが、年間の食糧を賄えるほどではありませんでした。蝦夷人の人口を支えられるほど豊漁だったのは、現在の静内川くらいで、そのため漁区権の争奪が起こり、シャクシャインの乱の原因の一つになりました。

その中で勇払場所のシコツ川（千歳川）は豊漁で、秋になると他の場所からもたくさんの人たちが出稼ぎに来ていました。「シコツ十六場所」とも言われ、千鮭の生産の中心

地でした。蝦夷人は秋から冬はシコツ川で鮭漁をし、それを干して3月末から夏まで、男女とも冬稼ぎの千鮭を背負い勇払越えの2里の山中を運び、美々から丸木舟で勇払まで運び、松前からの船を待つのでした。

寛政12年（1800）には、廻船を扱つていた運上屋は「会所」と名を改められ、勇払1カ所にまとめられ、勇払場所と総称されたことになりました。会所には幕吏が詰め、在来



千歳川を上るサケの大群

の運上屋の機能と公務を行う出張役所となります。シコツ川には出張番屋4カ所が置かれ、1カ所には通詞1人、番人4～5人が配置され、漁場を分担して、奥地の産物の収集、千歳越えの事務に当たらせます。

千歳越えといふのは、太平洋岸の勇払の海から、勇払川を遡り、ウトナイ沼から美々川に入り、美々で馬車でつくった四輪車に船を乗せてシコツ川まで運び、流れの速いシコツ川を一気に下つて、日本海側の石狩まで物資を運ぶというなんとも勇壮な方法でした。

文化元年（1804）5月、シコツ出張番屋4カ所を廃止して、売場会所・買場会所の2カ所にするとともに、鉄錢が交易に北海道で初めて使用されることになります。鉄錢の使用によつて蝦夷人はいちいち産物を持ち込んで欲しい物資と交換する必要がなくなり、遠地からの物資の入手も容易になります、また同族同志との交易も円滑になつて、産物高も増加したといわれています。

文化6年（1809）、売買両会所はサケの漁獲量の減少のため合理化が進められ、1カ所にまとめられて「千歳川会所」となりました。

# パンケ・ウタシナイの沢

沢から山あいを一気に貫流するパンケウタ

かんりゅう

シナイ川は上砂川町の「母なる川」です。時には暴れ、水害をもたらしたこの川「パンケ・ウタシナイの沢」を、むかしアイヌの人たちはパンケ・オタ・ウシユナイ(下の砂のある川)。隣のパンケ・ウタシナイの沢をパンケ・オタ・ウシユナイ(上の砂のある川)と呼んでいました。石狩川に流入する位置によって名付けられました。

明治32年パンケ・ウタシナイの沢沿いの鶴地ばかりだった村は、明治36年に三井砂川鉱業所が開かれる一変しました。住民が一気に増えて、官公庁13カ所、会社・工場が28カ所、病院・診療所が6カ所、映画館は2カ所もできる賑わいでした。

明治から大正の終わり頃まで和名・樺勘太郎というアイヌの酋長は、毎年秋の末になるとパンケ・ウタシナイの沢にやってきます。クマ獲りの名人で、沢の上流まで遡り雪穴を作つて住み、クマやタヌキ、キツネ、テンなどを獲つて暮らしました。毎年、鶴部落の人たち

は彼ら一家が狩猟道具や食糧などを背負い、沢の奥へのぼつていくのを見つめ、やがて厳しい冬が訪れるを感じるのでした。

入植が始まる4年前に、砂川保線詰所員だつた尾崎銀蔵が無償貸下申請の目的で未開のパンケ・ウタシナイの沢を視察しています。

「明治28年10月、午前7時頃砂川村を出发。行10数名全員、わらじ・脚絆(きやほん)を付け、握り飯、缶詰、酒などを背負う。東3線の墓地

あたりから密林となり、歩行困難のため川へ下る。水量はいまの2~3倍、川幅は大差が

なく川床は硬盤である。川岸の形勢にしたがつて右岸に渡つたり、左岸に越したりしつつ遡る。

水は極めて清冽。5、6寸のヤマベがおびただしく棲み、2尺ほどのマスも見た。両岸は急勾配で、水辺・崖の中途にはカツラ、ゼン、タモが多く、巨木は黄葉して天にそびえ、トドマツも繁茂していた。

コクワ・ブドウの類は巨木の梢まで巻きつき果実を垂れ、手のとどく熟した実を取り食べつゝ進んだ。自然に腐朽した木の根もとにはムキタケが群生、洞のある木にはフクロウ・ミニズクが潜む。午後1時頃登りやすい崖を上り、少し開けた場所の巨大な倒木に腰をかけて酒をふくみ、弁当を食べ、周囲を見渡すが密林で展望はきかなかつた。

帰路は方向を歌志内に取り、山を越えてモンペの沢に出たが非常に時間がかかり、歌志内についたのは家々に灯りのつき始めた夕方であった。」

尾崎の視察は難行と準備不足のためこれだけで終わっていますが、昭和16年に談話筆記された文章からは、開発前のパンケ・ウタシナイの沢の当時の様子が浮かんできます。



# 雨竜フシココタン

天保年間の1830年頃幕府は、ヲシラリカ(尾白利加)から恵岱別川の源流部分を経て増毛の信砂川に至る道を開削していました。雄冬岬の日本海航路の難所を避けて石狩川経由で増毛に出るルートでした。

交通の要所となつた石狩川と雨竜川の合流する地点を雨竜ブトといい、ここに雨竜フシココタンがありました。古くからアイヌ民族が住んでいて、安政3年(1856)から5年にかけて天然痘が蔓延し、死亡したりこの地を捨てたりして、フシココタンには人がいなくなりました。ウエンコタン(悪い村)といわれたその時期に、松浦武四郎はこのコタンを訪れ、コタンの崩壊の様子を詳しく書き残しています。

明治20年代になつて、雨竜原野に和人が入植し、開拓が始まります。はじき出されるように深川方面のアイヌたちはその地を後にして、雨竜ブト・フシココタンに集まつてきました。15戸くらいの部落となり、丸木舟で漁をしたり、狩猟をして暮らしていました。

明治21年、華族組合農場が開設されて、



平成2年「滝川」5万分の1国土地理院



明治44年「滝川」5万分の1陸地測量部

入植者移民招致のために伏古渡船場を新設しました。当初は丸木舟を使つていましたが、交通量の増大によりワイヤー利用の滑車式応用の馬渡船に変えて運航していました。低廉な料金で運航していたのですが、季節による水量の変化、流木の漂蕩、融雪期の流水など幾多の障害や経営難と、重要性を考慮し、永久橋架設が検討され、やがて昭和33年に着工から7年の歳月と巨費をかけて江竜橋が完成し、伏古渡船場は役目を終えました。

雨竜フシココタンのアイヌは山で獵をしたり、川で漁をして暮らすものと、開拓者として変身するものが分かれていきました。上川アイヌと空知(中川)アイヌにはそれぞれの風習があり、それは生活の細かなところにも現れます。上川アイヌに生まれその風習を身につけ、空知アイヌに嫁いだ人などは文化の違いに苦労したことでしょう。

熊を山の神として崇めつゝも、熊を猟るということは、生活の糧を得るためにものです。が、それ以上に家族を思い、神の恵みに感謝し、自己に厳しく生きる深い精神生活に支えられているものかも知れません。

昭和5年頃の経済恐慌が日本中に吹き荒れるなか、農場側から立ち退きを要求され、雨竜フシココタンは消滅してしまいます。

# 沼田町のはじまりと喜二郎

明治27年、富山県出身の沼田喜二郎が同郷の18戸を入地させたのが沼田町のはじまりです。沼田町には雨竜川をはじめ指定河川、無名河川合わせておよそ30本の川がひしめき合いながら、平地を流下して雨竜川から石狩川に合流、日本海へ注いでいます。

雨竜川はその源を幌加内の奥地に発し、雨竜ダム(朱鞠内湖)にいたん貯水され鷹泊ダムを経て、沼田町を通り石狩川に合流しています。以前はほとんどが原始河川のままだったため、たびたび氾濫(はんらん)し、洪水を起こしていました。特に明治31年の水害は道内各地に甚大な被害を与えました。沼田町でも9月6日から7日にかけて雨量155.7mm、降雨46時間という記録的な多さでその年の農作物は収穫皆無(しゅうごく かいむ)という悲惨な状態でした。

雨竜川沿岸一帯は豪雪地帯で水量が豊富だったことから、開拓当初から舟運が盛んでした。沼田喜二郎は開墾の妨げになっていた森林に着目しました。製材会社を立ち上げ、雨竜川流域の良質で豊富だった森林を伐採(りゆうそう)し雨竜川から石狩川へと流送をはじめまし



沼田町の水田地帯を走る機関車

で北竜にあつた役場や郵便局・商店・旅館などが次々と沼田に移ってきます。ここには沼田喜二郎の鉄道誘致への政治的尽力と自分の土地を駅の敷地に寄付したり、建設費用の寄付などがありました。さらに喜二郎は駅前市街地を整備して、新興市街へと様変わりさせていきました。

大正11年、日本国有鉄道はこの功労者の名をとつて駅名を「沼田駅」としました。喜三郎が没する前年のことと、現在の町名もここに由来します。

また、喜二郎は水田事業にも強い関心を持ついました。沼田は札幌より冬は気温が5度くらい低いが、夏は5度くらい高いので、米づくりは可能だと考えました。札幌方面から種子を買い付け、米の試作をはじめます。そして自己所有の農場を水田に変え、奔川(ほんがわ)から導水しました。沼田では始めての灌漑溝(かんがいこう)です。その後は洪水などに対処するための土功組合を作り、雨竜川などの築堤(ちくてい)や用水路の整備等に積極的に取り組んでいました。こうして現在の米どころ、沼田の基礎が築かれたのです。

## 雨竜川の源流

雨竜川は、石狩川の432支流の中で、空知川(196km)に次いで2番目に長い155kmの支流です。この源流部分の幌加内町母子里は、昭和53年2月17日にマイナス41・2度の日本最低温度を記録しています。



幌加内母子里 天使の囁きを聞くつどい

りません。雪道の雪の塊を蹴るとカラーン、カラーンと空き缶を蹴ったような音がします。また、畑に積もった雪は、まさにパウダースノー、澱粉のよう風の吹くまま舞い上がります。標高は約300mなのですが、山間部を吹き抜けて来た風が一気に上昇するのでこの寒さが生まれると言われています。

雨竜川の雨竜は、アイヌ語に由来しますが、その語源となると「神のみぞ知る」と言つて識者は断定しません。フウリウという怪鳥がいて村人を困らせていたので、このフウリウ伝説から生じたというのが有力です。ウという水鳥がいて、この鳥の足跡のウリロペツからだと言つて譲らない人もいます。

雨竜川のことが幕府の実測図に現れるのは1830年頃の天保年間です。これには現在、北竜町和から恵岱別川をさかのぼり、増毛の信砂川に出る信砂越が朱書きされています。ラシラリカ(尾白利加)、ラムシロナイ(面白内)、エタイヘツ(恵岱別)などの里程が明記されています。冬の雄冬岬は航路の難所なので、増毛に上陸し、この信砂越えをして石狩川を下つたのは、文化5年(1808)津軽落武四郎は、ここから引き返しています。

これを記念してクリスタルパークが造成され、氷片を思わせるようなモニメントが天を突いています。地元の人は寒さが来れば、春が来ると言いますが、1月の下旬から2月の上旬にかけて、マイナス30度や、35度の寒さが波のように迫ってきます。寒波とはよく言ったものですが最初の体験者には、とてもとてもこの寒さの中で春を考える余裕などあ

松浦武四郎は安政5年(1854)雨竜川を遡っています。信砂越もしていて、雨竜川上流の現在の鷹泊ダムの所を次のように書いています。

「北側の岩伝いにもりを杖の代わりに、大きな岩の上をとび石伝いに三百間余りいくと、両岸はいよいよ高くなつて筆では書き表すこともできないような奇景である。」(1)で行き止まりとなつて川の流れは緩やかに、深い渕に水をたたえている。鳶のつるをとつて石を重りにして水深を測つてみたが十尋(約18m)の長さでも底にとどかなかつた。」

(石狩日誌・丸山道子訳・五月一四日)



鷹泊ダム

# 川と鉄道がつくる町

比布の町名は、アイヌ語の「ピピ」または「ピ

プ」(石の多いところ)からとされています。明治28年に滋賀県や香川県、愛媛県からの移住者が比布原野に入植し、開墾したのがはじまりです。

比布の町にはじめて鉄道が敷かれたのは明治31年のことでした。旭川から蘭留まで宗谷本線が延長されて、石狩川をまたいで比布駅と蘭留駅が設置されました。

当時の村人たちの大変喜びました。それまで毎日の暮らしに必要な品物は、旭川や永山まで出かけて買っていましたが、交通の手段としては馬車が主なものでした。旭川などに馬車で行くと、往復に何日もかかるていましたが鉄道ができることによって時間や距離が大幅に短縮され、町の人々の生活は非常に便利になりました。

大正時代の石狩川上流部は、原始河川のままでしたが、その石狩川を利用しての木材流送が大正4年から始まります。愛別、上川の森林地帯から伐採された木材を搬出し、石狩川の上流から流す勇壮な事業でした。石狩川の上流から流す勇壮な事業でした。

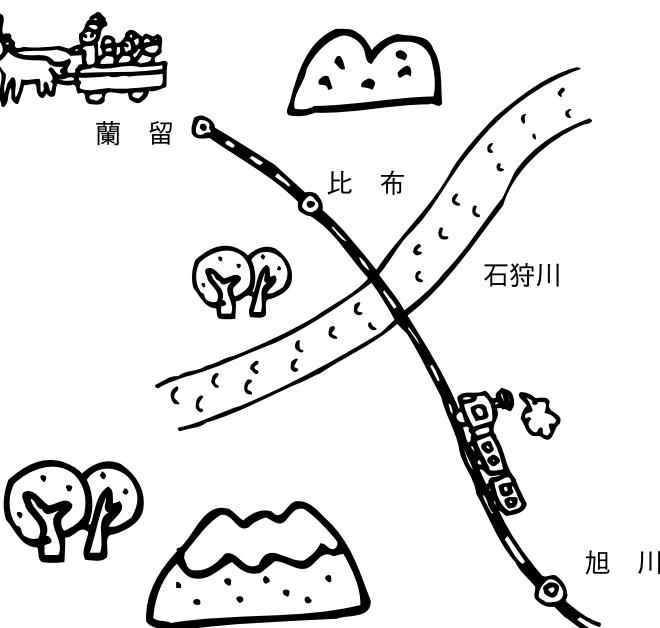
た。木材流送の拠点となる陸揚げ場として選ばれたのが、比布です。その場所は比布村6号道路地先のあたりでした。

流送の仕事にあたる人夫たちが大勢入り込むようになり、比布の町にはたくさん旅館や料亭が次々とできました。流送の仕事は、危険をともなう荒っぽいものだったので、人夫たちに支払われるお金は相当高額だったそうです。

また比布には渡船場もあり、舟での往来も盛んでした。蘭留の駅には、剣淵や士別に送られる品物が降ろされて、ここから馬車で運ばれていきました。士別などに移り住む開拓者も大勢いて、当時蘭留に170戸以上も家が増えたとのことです。川の拠点と鐵道の拠点が繋がった比布の町は、商業や工業の町として大いに栄えていきました。

大正11年11月に、石北線が愛別駅まで開通すると、木材はみんな愛別駅から貨車で積み込まれるようになります。木材流送の陸揚げ場として盛況をきわめた比布はにわかに閑散としていきました。

しかしその後、比布町は稻作を中心として、野菜や果物を生産する農業の町として発展していきます。特にイチゴは名産で「スキーとイチゴのまち」として知られています。



層雲峠、上川、安足間の森林から切り出された木材は、石狩川の川面が見えないくらい川をいっぱいに埋め尽くし、何百mも続いたそうです。流された木材は、2昼夜くらいで比布の陸揚げ場に着きます。そこから比布駅まで運ばれ、貨物列車で目的地まで送られていきました。

# 開拓と屯田兵

とん でん へい

はるか昔、当麻町の位置する上川平原は融雪期になると、石狩川の本支流が縦横に暴れながら走っていました。当麻の地名の由来はアイヌ語の「トウ・オマ」で、沼地の意味です。石狩川、牛朱別川、当麻川、清水川などの氾濫<sup>はんらん</sup>でいたるところに沼や湿地<sup>しち</sup>がありました。繩文の時代から住んでいた先住民は、川に面した緩やかな崖の斜面で、遙か大雪<sup>たいせつ</sup>の噴煙<sup>ふんえん</sup>を眺めていたのでしょうか。

1800年代に入ると、江戸幕府の命により近藤重蔵、松田市太郎、松浦武四郎らが相次いで上川に入り、アイヌの協力を得て、石狩川水域の探検をしています。松田市太郎は安政4年(1857)、石狩川の水源を探るために石狩川を遡り、忠別太番屋(現在の旭川)に入り、番人とアイヌ4人を伴つてウエンベツ(宇園別)、ピープ(比布)、アイ・ペット(愛別)、そしてトウ・オマ(当麻)を訪れています。当時、アサカラ(当麻の石狩川沿い)にはアイヌの住居がありました。かつて柏<sup>お</sup>などなどの雜木林<sup>ぞうき</sup>が続いた丘陵地帯や雜草<sup>よくちた</sup>の生い茂った沃地帯もいまでは水田に変わっ

ています。



切り出された木材が半分くらい使われました。「今トオマと称し、永山村の東北、ウシシユベツ川(牛朱別川)と石狩川との間に開拓す。ウシシユベツ川の支流トオマナイ(当麻川)の沿岸に建設せられし屯田兵村なればなり、明治二十六年四百戸、来住す」と書き残されています。

北海道の開拓には、北方問題に対する軍事的要求が一つの原動力になつていて、当麻の屯田兵入植<sup>にゅうしょく</sup>もこの一環でした。明治24年、当麻が属していた永山村に400戸の屯田兵が入植しました。全国から応募した人々は、小樽港から原始林の石狩平野を北上し、空知太<sup>おとえ</sup>へ入り、ここから上川道路を歩き続け音江法華<sup>おとえほりけ</sup>、国見峠を越えて忠別太、そして永山村字トオマに入りました。翌25年、隣の旭川村(現在の東旭川)に400戸、26年に当麻に第一陣の101戸その後400戸となり、屯田兵歩兵第三大隊1,200戸の編成<sup>へいせい</sup>が完了しました。ちなみに北海道で最初に屯田兵が入った札幌郡琴似村は198戸でした。永山の屯田兵屋の建設には当麻から

明治33年永山村から分村、今までの永山村字トオマを、古老人の言によると麻が非常に良くできる土地なので、「麻が当たる」という意味から「当麻」にしたそうです。昭和33年町制施行とともに当麻町となりました。

## 源流のまちと橋

上川町の名前の由来はアイヌ語で「ベニウングルコタン」川上の人の村という意味から付けられました。名前の通り石狩川の最上流域に位置しています。石狩川の全長268kmのうち、約70kmが上川町を流れています、その石狩川に流れ込む支流は無数にあります。留辺志部川をはじめ、主な支流だけでも40支流になります。上流部の石狩川は、暴れ川の名の通り激しい流れはしばしば変わり、一・二股・三股に分かれ、ところどころに中州を作っていました。本流の位置でさえ時々変わっていたほどです。

中・下流域では道路網が整備される以前、川は道として舟運や渡船など河川交通として大いに利用されてきました。しかし上流部は木材の流送などを除いて有効的な利用はありませんでした。川は交通を断ちきり、妨げるものでした。開拓のはじめ、比較的小さな川は丸太橋や木橋が架けられましたが、石狩川本流には橋が架けられていませんでした。昔の人は、がけに木を倒して一本橋をつくり、流されてはまた太い木を倒して橋にして市

街地へ出かけていきました。

町の中心部は右岸沿いに発展してきましたが、左岸の人々は石狩川に隔てられ孤立感に悩んでいました。真勲別地区でも明治39年の入植以来から幾度となく架橋が試みられ、伐木や倒木を使った丸木橋から始まり、明治41年によく橋らしいものができ、真勲別橋といわれました。植民道路の一部として6線8番地に架けられた12間(約22m)の木橋でした。これで市街地へ簡単に行き来できるようになりました。住民は大喜びでした。

大正11年8月、集中豪雨は未曾有の大出

水を起こし、層雲峠塩谷温泉や国沢温泉を流失させ、

真勲別橋も流し去っていきました。

白雲橋も石狩川を越えるのにとても便利な橋でした。白雲橋も石狩川を越えたが川幅が広いために大水のたびに流されました。一の

橋、宮下橋などは丸太を2

本渡しただけの簡単な橋で毎年のように架けては流され繰り返していました。

対岸からお葬式に出席しました。



昭和9年、真勲別橋流失から12年の年月を経て、悲願の「菊水橋」が架橋されました。しかしその後、この菊水橋も川幅に合わせた十二間橋で長く、立派な橋でしたが水害のたびに破損や流失があつたため、昭和41年にコンクリートの永久橋として生まれ変わりました。